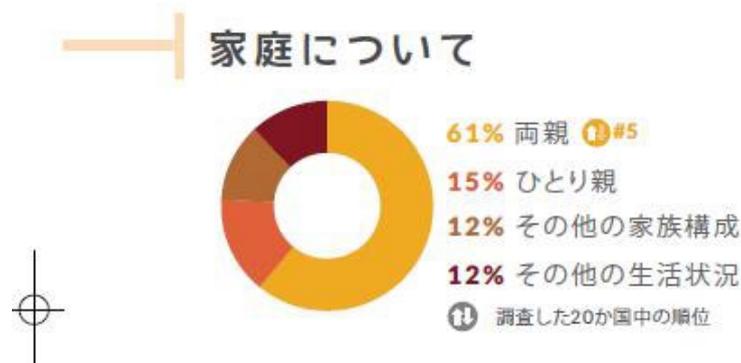


統計についての信頼と考慮すべき点

日本を含む世界の20カ国での十分な人数を対象としたティーンへのアンケートは、十分に信頼に値し、多くの大切な示唆を与えるものとして感謝しています。

ただ、一点、日本における回答者の家族構成については考慮すべき点があるでしょう。親と同居していないと思われる「その他の家族構成」が12%、また、家族と生活をしていないと予想される「その他の生活状況」も12%です。合計すると親と暮らしていない回答者が全体の約4分の1にも及びます。



これは一般的な比率からは、かなり離れていると言えるでしょう。児童期までの親子関係は、とりわけ思春期以降の性意識と結婚観に、多大な影響を与えるだけに、この偏りは考慮すべきでしょう。

では、以下に、この前提に立って、「性」に関連する事項に絞って、私なりの結果分析と考察を記します。

ポルノの視聴についての意外な結果



この回答結果は、私にとっては予想外でした。「最近ポルノを視聴した」と回答したのは、日本は20%で20カ国中、最低で、男子に限っても29%であり、意外であり驚きを覚えています。これは、ポルノを嫌悪する道徳心よりも、男子の草食化やアニメの異性を恋愛対象とする二次元萌えが要因でないかと想像しています。

宗教別ポルノの視聴



また、日本だけでなく世界全体においても、クリスチャンの方が未信者より割合が高いとの結果も驚きをもって受け止めざるを得ませんでした。このことは、親や教会からの禁欲的に思えるメッセージや実際の性行動を思いとどまっていることへの反動ではないかと予想します。

全体として、恒常的にポルノを視聴している割合が少ないのは、安心材料ですが、クリスチャンだから、大丈夫と考えないことでしょう。

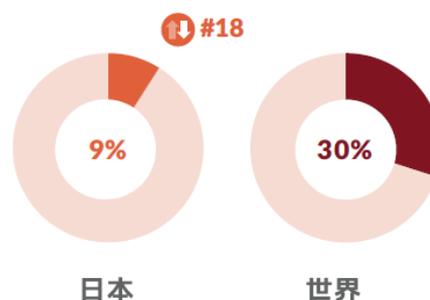
結婚前の性交渉の容認度と実際の性行動



結婚前の性交渉について容認する回答は、日本が65%で、世界平均の51%を上回ります。日本においては宗教的な文化が希薄であること、また、他者の価値観を否定しないよう学校教育で教えられてきたことなどが要因かと思われます。それでも、65%という数字は、日本のティーンが、一般に思われているより、はるかに慎重であることを示していると言えるのではないのでしょうか。

その一方で過去3ヶ月に性行為をした割合は、9%で、世界平均の3分の1未満です。つまり、世界平均と比較するならば、結婚前の性交渉についての容認度が高いその一方で、自分自身の性行動においては、慎重、あるいは活発ではないというのが、日本のティーン注目すべき特徴と言えそうです。

性行為をしている



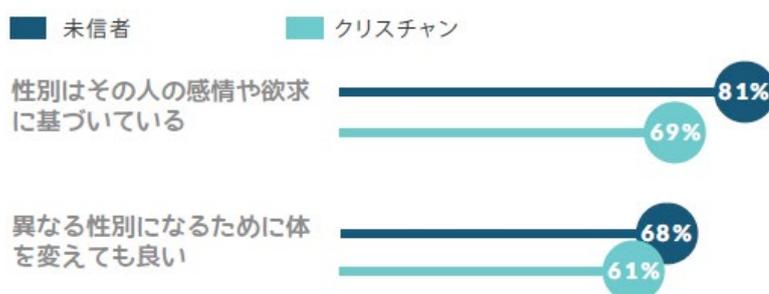
調査した20か国中の順位

10年以上前から、性の低年齢化は終わり、恋愛や性への興味があまりない草食系男子の増加が指摘されています。性行為をしたと回答した男子の割合が女子の半数であったことは、その傾向を示しているように思います。また、欧米とは異なり、妊娠した女性生徒が高校に通い出産に向かうことが事実上許されない日本社会にあっては、妊娠のリスクへの恐れから、女子も慎重とならざるを得ないのではないのでしょうか。

性意識においても、実際の性行動においても、日本のティーンは、一般に思われているより、奥手で慎重なようです。この点においてはメディアが与える偏った情報に惑わされているなら、事実認識を改めたいものです。そして、正しい事実認識に立った上で、若い世代の幸せな性のあり方を考え、助けてゆきたいと願いました。

LGBT に対する寛容度

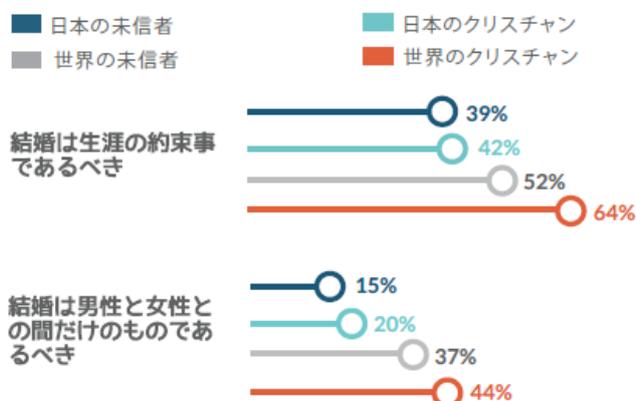
信仰がもたらす影響



「性別はその人の感情や欲求に基づいている」「異なる性別で生きるために体を変えても良い」との質問への回答は、世界的には、クリスチャンと未信者の見解は対立する傾向にあるのですが、日本は例外的で、クリスチャンと未信者の見解に大差がありません。

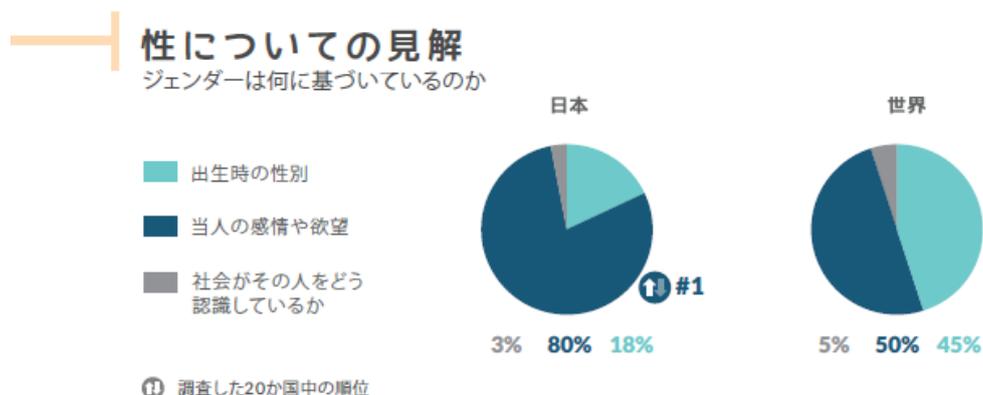
このことは「性自認」だけでなく、「性的指向」についても同様の結果となっています。

宗教別の結婚観



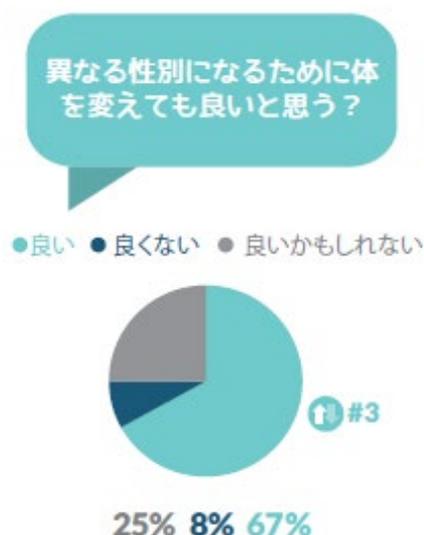
世界のユース文化調査についての考察① 水谷潔 師

「結婚は男性と女性との間だけのものであるべき」への回答に、そのことが現れています。しかも、日本のクリスチャンの同性婚容認の割合は、世界の未信者の平均を大きく上回ります。



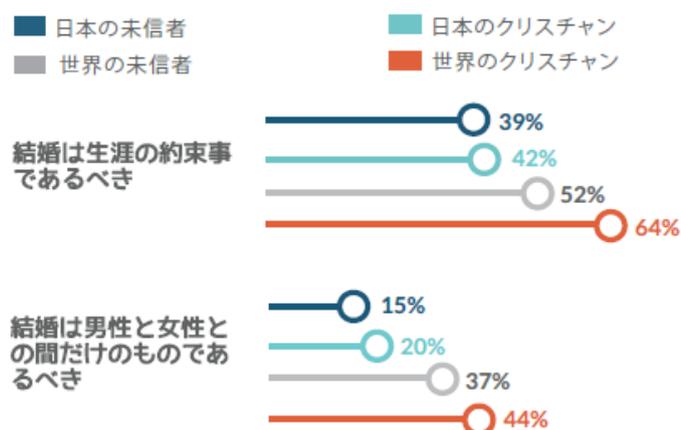
つまり日本のクリスチャンのティーンたちは未信者とほぼ同様の割合で、性は本人が決めるもので、自らの性的指向に従って結婚してよいと考えているわけです。これは、日本のキリスト教会の多くが LGBT について、明確な見解を持ちえず、指導的立場にある大人たちも親も、若い世代に語る事ができずにいることが要因と思われる。

他の調査によれば、LGBT に対しての世代間の容認度の際は、世界の主要国では、日本が最大だそうです。上の世代が語らないままであれば、今後、LGBT の評価についての世代間の格差が教会において課題となることを危惧しています。



信仰の影響から遠い結婚観

宗教別の結婚観



結婚について、「生涯の約束事であるべき」と考える日本のキリスト教の割合は、未信者と大差がなく、しかも、世界の未信者の平均より10%低い値です。これは、家庭生活においても、メディアにおいても、結婚の価値が伝えられず、むしろ否定的な評価に触れることが多い日本の文化背景によるものと思われます。

しかし、キリスト教たちも、結婚を神と人との前での契約関係と考えるよりも、恋愛同様に、当人同士の意向で解消してよいと考えているわけです。教会で思春期以前の児童期から結婚の祝福と尊厳が、十分伝えられていない現状があるのでしょうか。

しかし、もう一つ大きな要因があるように感じています。キリスト教回答者の親たちの多くはキリスト教であると思われます。キリスト教である両親夫婦、あるいはキリスト教である片方の親の結婚生活が、幼い頃から思春期に至るまで、子どもの目にどう映ってきたかは問われるでしょう。また、冒頭で触れたような回答者の家庭構成も少なからず影響を与えている可能性も考えられます。

結婚観は、性意識と性についての価値観にも多大な影響を与えます。性は結婚した夫婦の交わりという目的を持ちますし、聖書が示す性は、結婚を前提としています。つまり、聖書によれば、結婚は性の目的でありかつ前提です。それ故に、日常生活において結婚の恵みを子どもに証しすることは、聖書的結婚観の視聴覚教育となるのみならず、言葉によらない実際的な性教育にもなるのではないのでしょうか。

家庭と教会で結婚と性の教育を

パウロは異邦人の教会に対して、飲食などについては判断の自由を認めながら、偶像礼拝と姦淫だけは避けるよう指導をしました。聖書が記す性についての価値観は、クリスチャンと未信者を明確に分けるものです。そして、結婚を尊重する性の歩みは、世俗世界に最もインパクトある証しとなるはずで

その一方で、調査結果から見えてくるのは、思春期やそれ以前に、家庭と教会において、十分な結婚教育と性教育がなされていないであろう現状です。私は厳しい表現で恐縮ですが、このことを「性教育ネグレクト」と呼んでいます。

実際に、中学生以降青年期までにクリスチャンたちが、性的過ちを犯して教会を離れ、それを親と教職者が知らないケースは少なくありません。また、LGBTの傾向を自覚し、自分は、教会に受け入れられないと判断し、誰にも相談することなく、離れていくティーンもいるのが現実です。その意味でも、ネグレクト状態に終止符をと願います。

今回の調査結果は、日本のクリスチャン・ティーンズの性的現状を伝え、その原因を予想させ、上の世代の教育責任を示すものと言えるのではないのでしょうか。結婚教育と性教育の実践を通じて、ティーンズが教会を離れることなく、成長し、祝福された結婚や実りある将来へと向かっていくことを切に願っています。

世界のユース文化調査について

この調査はOneHopeが20カ国に住んでいる合計8,394人のティーンズ(13-19歳)を対象にしたものです。この20カ国のうちに日本が含まれていて、日本の若者と世界の若者の考え方や生活の共通点や違いを学べます。

取り扱っているトピックは

- ① 宗教的態度と行動
- ② 個人的な体験と葛藤
- ③ インターネット生活とその影響
- ④ アイデンティティと人間関係
- ⑤ ティーンたちへの影響と指導的な声 です。

世界のユース文化調査の世界版と日本版は OneHope のウェブサイトからダウンロードできます。

➡ <https://onehopejapan.net/2022/05/gyc2022>